

往生要集の救い——地獄・極楽・念仏——

大谷大学教授 ロバート F. ローズ

皆さん、こんにちは。ただいまご紹介いただきましたロバート・ローズです。今日はキャンベル先生と一緒に講演ができるということで、非常に楽しみにしてまいりました。

早速講演の内容に入っていきたいと思います。今日は次の四点についてお話しようと思っています。

最初に『往生要集』とその作者である恵心僧都源信についてお話したいと思います。その次に『往生要集』の内容に入り、「往生要集の六道観」と「往生要集の極楽観」の二点について見ていきます。そして最後に『往生要集』が書かれて一年経って結成された「二十五三昧会」という念仏結社について簡単に紹介して終わりたいと考えています。

『往生要集』

最初に『往生要集』はどのような書物なのかといえますと、一言でいうならば、浄土教を日本に定着させた書物、あるいは日本に浄土教を本当の意味で根づかせた書物と言っているのかなと思っています。

『往生要集』の作者は、恵心僧都源信という方です。九四二年に生まれ、一〇一七年に亡くなられた方ですが、この年代を見てお気づきだと思いますけれども、ちょうど昨年の一〇一七年が源信の没後一〇〇〇年に当たる年でした。そして今年が没後一〇〇一年ということになります。

『往生要集』の奥書を見ますと、この書物は寛和元（九八五）年の四月に完成されたと書いてあります。そして、そのすぐ後に永観二（九八四）年十一月に筆を起こして書き始めたとも書いてあります。つまり源信はわずか六ヶ月で、この書物を書きあげたということになります。『往生要集』はかなり長い書物です。そして、その中には一六〇ほどの経典論書から一〇〇〇近くの文書が引かれています。ですから、そのように膨大かつ緻密で、組織立てて書かれた書物が、はたして六ヶ月で書けたのかという疑問を呈した先生方もおられたわけです。そのような書物であるということ念頭に置いていただければと思います。

こちらは『往生要集』の写真（図1）なのですが、これは本学が所蔵している鎌倉時代の版本です。

次に、源信について簡単に紹介しておきたいと思います。伝記によりますと、大和国葛城下郡当麻郷に生まれたと書かれています。ここは奈良盆地の南西の角、当麻曼荼羅で有名な当麻寺のそばです。そこで生まれたということです。

さらに伝記には、源信の父親は「道心なきといえども、性は甚だ質直なり」と書いてあります。つまり、あまり宗教に関心はないけれども、性格は非常に実直な人だったということです。それに対して、源信の母親は「これ善

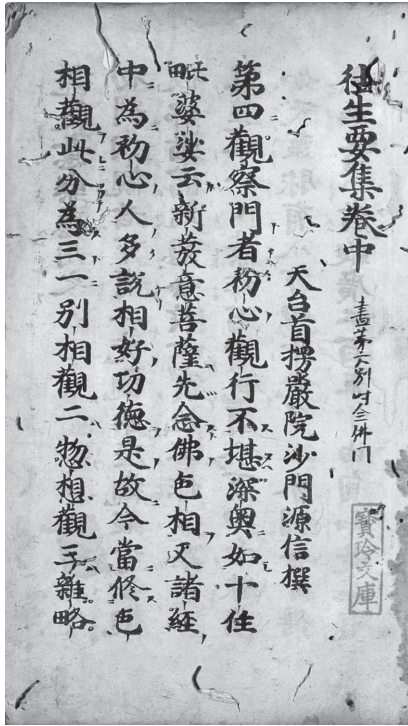


図 1

女なり、大道心ありて、出家入道して西方の業を修せり」と書いてあります。つまり、母親は熱心な仏教者で、ついに出家して尼僧となつて「西方の業」を修業したということです。「西方の業」とは、西方にある阿弥陀仏の浄土に往生するための念仏の修業のことです。

この二人の間には一男四女がいました。男の子は当然、源信のことですけれども、姉妹が四人おられたのです。そのうちの二人は、母親の影響もあつたと考えられますが、出家して尼僧になりました。その尼僧になつた二人は、『往生要集』よりも少し後に書かれた『往生伝』の中に、短い伝記が載っています。それほど周りの人たちから注目されていた念仏者であつたということになります。特に妹の願証は安養尼ともよばれ、「才学道心、ともにその兄にこえたり」と評価されています。兄の源信よりも、学才(学問)、そして道心(宗教心)ともにはるかに優れてい

たということです。この当時の女性は、才能があつてもそれを発揮する機会があまりなかつたようですので、願証が今生きていたら、どんなすごい人になつたのかと思いを巡らすと、もつたないと思ふこともあります。

恵心僧都源信(九四二—一〇一七)

次に、源信についてですが、彼は九五六年ごろに比叡山に登つて天台宗の僧侶

になりました。若いときは順調に学問を修めて、将来必ず天台宗を支えていく人になるであろうと思われるほどの学僧に成長しました。しかし、九八〇年ごろに急に比叡山の北端の横川に隠遁してしまいます。そして天台宗の公の行事には出ずに、横川の地にこもって修行と勉強に専念する生活を過ごすようになります。その理由についてはあまりよくわかりません。源信自身は何もそのことについて書いていないのですけれども、母親の影響が大きかったという説話があります。

このお話は皆さんよくご存じだと思えますけれども、簡単に紹介しておきます。あるとき源信は宮中によばれて、宮中の法会に参加します。そしてその法会が終わったときに、褒美としていろいろな素晴らしいものをもらいます。そのもらったものの中から一番素晴らしいものを選んでお母さんに送るわけです。それはお母さんに褒められようと思っただけのことでしたけれども、その後にお母さんから手紙がきて、褒められるどころか怒られてしまうのです。お母さん曰く、「あなたが送ってくれたもの、本当にありがたく受け取りました。しかし私があるあなたを仏門に入れたのは、宮中に出仕して、天皇やお公家さんと関わりを持って、世間的な名誉を得てもらったためではありません。仏教をきちんと勉強してもらいたいから、僧侶になってもらったのです。」そのような手紙を受け取るわけです。

これをきっかけとして、源信は横川に隠遁したと言われています。これは非常に有名な話で、『今昔物語』などに見られます。この話は源信が亡くなって、間もなくして書かれたと考えられる伝記にも載っていますので、あなたが後の時代の作り話ではないだろうと思います。

ただし、お母さんの言葉が横川隠遁の直接のきっかけになった可能性は高いと思うのですけれども、それだけではないと私は思っています。と言いますのは、この当時の比叡山はちょうど非常に激しい派閥争いが始まる時期だったからです。この後一三年経った九九三年になると、僧兵の間での武力衝突が起こって、天台宗が二つに割れて

しまうという事件が起こります。この九八〇年ごろにはもうそのような派閥争いが激化してくる兆候が見えてきて、源信はそういうことに嫌気がさしていたのではないのかと思います。そのため母親の言葉が直接の原因であったとしても、やはりその当時の比叡山の状況が源信の横川隠遁に影響しているのではないかと思うわけです。

そして、横川隠遁の五年後の九八五年に『往生要集』を完成します。横川に隠遁した後、源信は浄土教に大きな関心を持つようになり、本格的に浄土教の研究を始め、五年かけて勉強した成果を九八五年に『往生要集』としてまとめました。先ほど『往生要集』は六ヶ月で書かれたと言いましたが、たぶん源信はこの九八〇年ごろから浄土教についての研究に没頭して、少しずつ『往生要集』の構想を練っていたのだと思います。最終的に筆を執って書いたのは六ヶ月ですけれども、その六ヶ月の裏には五年間という長い間の浄土教に対する思索があったのではないかと思っております。

源信以前の浄土教

『往生要集』に入る前に源信以前の浄土教について簡単にお話しておきたいと思います。浄土教が日本に入ってきたのはいつかという点、あまりよくわかりません。しかし文献上最初に出てくる、浄土教に関して信頼できる最初の記述が『日本書紀』の中に見られるものです。それは六四〇年に慧隱という僧侶が宮中に招かれて『無量寿経』について講義をしたという記録です。

この慧隱という方も非常に面白い僧侶であります。よくわからない人物です。彼は二十年間ほど中国に留学して、その当時の最新の仏教を勉強し、宮中での講義の一年前に帰国したばかりの僧侶だったのです。宮中では、長い間中国で勉強した僧侶が日本に帰ってきたので、招聘して講義をしてもらおうということになったのだと思いま

す。そのときに慧隱が浄土教の根本經典の一つである『無量寿経』の講義を行った。この『無量寿経』を選んだというところが非常に面白いと私は思います。

ですから、少なくとも飛鳥時代には浄土教は日本に入ってきていることになりました。しかし飛鳥時代・奈良時代・平安時代の初期を通して、浄土教についての学問研究は行われましたが、あまり人々の信仰としては弘まっていかなかったわけです。

しかし、平安時代になると、浄土教は九〇〇年代の前半に急速に弘まったのです。その大きなきっかけを与えたのが空也上人（九〇三―九七二）です。若いとき、空也は日本全国を回って修業したり、あるいは井戸を掘るなどの慈善活動に従事したりしていましたが、九三八年に京都に入り浄土教を弘める活動を始めます。そして、多くの人々が空也の念仏に感銘を受けて、浄土教に帰依するようになりました。空也の伝記を読みますと、空也が来る前は都では誰も念仏を称えてはいなかったけれども、空也が来てから皆念仏を称えるようになったと書いてあります。これはいささか誇張した表現だと思いますが、それだけ大きな影響力があったと言えるでしょう。

この空也の次の世代に源信が活躍することになります。空也上人は非常に優れた布教者なのですけれども、学者ではありませんでした。そのため文章は何も残しておりません。念仏の教えを弘めることはしましたが、それを明確な形で思想的に跡づけるということはありませんでした。そのような状況の中で源信の『往生要集』は非常に大きな役割を果たしたと私は思っています。

源信は非常に優れた学者でありましたので、この『往生要集』の中で浄土教の教理的ベースを構築しました。そして、そのような基礎ができた時点で、念仏の教えが人々の間で広く受け入れられるようになったと私は考えられます。

『往生要集』の組織

次に『往生要集』の内容に入っていくしたいと思います。

『往生要集』は比較的長い書物です。それは三巻よりなりますが、『往生要集』の一卷はわりと長くて、テキストによっては三巻各巻をさらに本・末に分けて、全部で六巻にしている場合があります。とにかく、比較的長い書物です。

そして、全体が十文(つまり十章)に分かれています。それらは次の通りです。

- 大文第一「厭離穢土」
- 大文第二「欣求浄土」
- 大文第三「極楽証拠」
- 大文第四「正修念仏」
- 大文第五「助念方法」
- 大文第六「別時念仏」
- 大文第七「念仏利益」
- 大文第八「念仏証拠」
- 大文第九「往生諸行」
- 大文第十「問答料簡」

今日は、それぞれの章についてお話はできませんけれども、注目してもらいたいのが第一と第二と第四なのです。大文第一の「厭離穢土」では、六道の苦しみが克明に描かれています。六道とは、一言でいうと迷いの世界で、

インドの神話的な表現を使いますと輪廻転生の世界です。この六道の世界は、源信によりますと、どこにいても本当に安らぎを得ることができない世界です。本当に安心していられるところがどこにもないのがこの六道の世界です。つまり源信は、六道を「苦に満ちた世界」として受け止めているわけです。

それを受けて、では、苦しみのない世界はあるのか、本当の安らぎを得ることのできる世界があるのかという問題提起をしまして、源信はそれに対して「実はあるのだ」と言っています。それはどこかということ、阿弥陀仏の浄土です。これが第二章にあたります大文第二の「欣求浄土」の内容になるわけです。この章では、源信は浄土の素晴らしさを「十楽」という形で表現しています。

このように源信は、私たちの迷いの世界は苦に満ちているところで、本当の安らぎを得ることのできない世界であると論じています。そして、そのように論じた上で、本当の安らぎを得る世界は阿弥陀仏の浄土しかないと力説して、次に大文第四の「正修念仏」で、苦しみの世界から厭離して浄土に往生するためには、念仏を行えばよいのだと詳しく説明しています。

この三つの章が、私が考えるには『往生要集』の最も中心的な部分です。「苦しみの世界」を描写した上で、「苦しみのない世界」を指し示して、そこに行く道を示している。ホップ・ステップ・ジャンプみたいな感じで話を展開しているのだと思います。

また大文第六の「別時念仏」のところには「臨終行儀」といって、臨終のときに念仏すれば往生できるといっても論じられています。この章も重要で興味深い章ですが、今日は時間の関係上、あまり取り上げることはできません。

六道の苦

そこで、まずは大文第一の「厭離穢土」の内容について見ていきたいと思えます。この「厭離穢土」の主題は、六道の世界が苦に満ちていることを解き明かすことにあります。六道とは、迷いの世界にいる衆生の六つの形態と考えていただければいいと思います。地獄・餓鬼・畜生・阿修羅・人・天——私たちの迷いの世界は、この六つの世界から成り立っていて、私たちは今は人間ですけれども、死んだら、もしかしたら地獄に生まれ変わるかもしれませんし、餓鬼として生まれるかもしれませんし、畜生として生まれるかもしれません。このように、私たちは大きな輪廻の中に存在しているということを、この章で論じています。そして源信は、この『往生要集』の最初のところで六道の一つ一つを取り上げ、それらがいかに苦しみに満ちているかを説いているのです。

八大地獄

では、六道の最初に出てくる地獄から見ていきましょう。『往生要集』の六道の中でも、この地獄が最も多くのページをついやして詳しく論じられているところです。源信は八つの地獄があると考えています。それを「八大地獄」といいます。それらは等活地獄、黒繩地獄、衆合地獄、叫喚地獄、大叫喚地獄、焦熱地獄、大焦熱地獄、そして阿鼻地獄（あるいは無間地獄）のことです。

ここで阿鼻地獄について、一言説明しておきます。この地獄のサンスクリットの名前が *avīci*（アヴィーチ）です。ここで、それを漢字の音で表現したものです。この阿鼻地獄はどのような地獄かというと、苦しみを絶え間なく受ける地獄ですので、この地獄を「無間地獄」ともいうわけです。

八つの地獄はこの地表の下深くに一つずつ縦に並んでいます。私たちの世界が一番近いところが等活地獄、その

下に黒繩地獄、その下に衆合地獄という形で阿鼻地獄まで続いているわけです。それらの地獄に共通する特徴が「炎」です。どの地獄に行っても炎に満たされていて、焼け爛れてしまう場所として、この「八大地獄」は考えられています。

「八寒地獄」もあります。「八大地獄」が炎の地獄であるのに対して、八寒地獄は寒さの地獄と言っていると思います。非常に寒いところで、寒さによって苦しめられる世界です。ただし、この八寒地獄というのはあまりポピュラーではなく、経典などにもあまり出てきません。源信も『往生要集』の中で一応八寒地獄の名前を列挙していますが、詳しいことは省いています。

そこで、地獄の苦しみについて見ていきたいと思います。個人的には最初の等活地獄が最も恐ろしい地獄であると思っています。そこに墮ちる衆生は手に鉄の爪が生えています。そして互いに憎しみ合っているのです、お互い顔を合わせると、「獵師が鹿を見つけた」ときと同様な感情を抱いて、相手を殺して捕獲してやろうという心が起ってくるのだそうです。そして「互いに掴み割り、血肉が尽き、残骨のみ」になってしまいうまで、互いに鉄の爪を使って取っ組み合い、肉がすべて落ちて骨だけになり、死ぬまで戦い続けます。そしてその後のように蘇り、元の姿になって同じことを繰り返すという地獄です。現代社会そのもののような非常に悲しい地獄です。

その下に黒繩地獄があります。ここでは熱い鉄の縄で衆生の身体に線をつけて、それに沿って斧やのこぎりや刀で切ります。大工が木材を切るときに墨の付いた縄で線をつけ、それに沿って木材を切りますが、それがイメー

ジされているのではと思います。

また、叫喚地獄では、衆生を熱した鍋に置いてあぶり、熱い釜に入れて煮るといことが繰り返されます。このような叫喚地獄の絵(図2)があります。左側が煮られているところ、右側が串刺しにされて焼かれている場面で



図2

す。この絵は「仮名書き絵入り往生要集」といって、江戸時代の木版で刷った版本です。

江戸時代には、『往生要集』はかなりポピュラーだったらしく、特に第一章の六道の場面と第二章の極楽往生の場面を『往生要集』から抜き出して、もともとの漢文を仮名に換え、イラストを入れて販売されたようです。

かなり人気だったようで、版も何回も重ねられますし、新しいイラストが作成されたりもしました。大谷大学図書館にも数種類の「仮名書き絵入り往生要集」があります。江戸時代では、こういうものが読み物として販売されていたようです。

ここでちょっと注意しておきたいことがあります。それは、地獄の衆生は何故これだけの苦しみを受けるのかということ。単に苦しみを与えるということだけではなく、その裏にはちゃんとした理由があるということ。とを覚えておかなければならないと思います。

仏教では、「因果応報」という言葉があります。これは、良いことをすれば良い（好ましい）結果を得るし、悪い

ことをすれば悪い結果（好ましくない結果）を得るという教えです。『往生要集』でも、地獄に堕ちた人々が、なぜグロテスクと言っているほどの苦しみを受けるのかということが示されています。つまり、地獄での苦しみは、因果応報の道理によって得られる、それぞれの地獄の衆生が生前の行為の結果として得る報いなのだということが語られているわけです。

『往生要集』の中では八つの地獄が描かれていますけれども、そのうちの四つの地獄の描写の中では、獄卒（地獄の番人）とその地獄に堕ちた衆生の間の対話があります。そこでは地獄に堕ちた衆生が「どうして私にこんな苦しみを与えるのですか。私を苦しめるのをやめて助けてください」と獄卒に訴えます。獄卒はそれに対して、「それはあなたの責任です。あなたが前世で悪いことをしたから、今こういう苦しみを受けているのです」と諭すのです。

地獄の苦しみというものには、ちゃんとした道理があるということこそ源信は何回も『往生要集』の中でおさえています。このことを念頭に置いておかなければならないと思っています。

地獄はこのくらいにしておきまして、餓鬼の世界を見てみましょう。これが餓鬼の描写（図3）です。皆さんは餓鬼をどのようにイメージしていますか。私は長い間、餓鬼といえば、平安時代につくられました『餓鬼草紙』に出てくる、おながが大きくて、口が小さくて、何も食べられずに飢えている存在だと思っていました。でも実は仏典の中にはいろいろな種類の餓鬼がいるのです。源信は『往生要集』の中で十一種類の餓鬼を挙げています。それらすべてに共通する点は、いろいろな生理的な欲望があるけれども、それが満たされないということです。

この絵では、左側にいる二人と、下で水を飲もうとしているのが餓鬼です。普通の人間みたいに見えますけれども、ここでは何が描かれているのでしょうか。ポイントは二人の餓鬼の前にあるものです。これはご飯が盛ってある椀です。餓鬼の苦しみというのは、食べ物が目の前にあっても、それを食べようとすると、そこから火が噴いて



食べられなくなつてしまふといふことです。あるいは
 餓鬼がご飯を食べようとすると、鬼がやってきて、
 食べさせないように妨害するわけです。下の方には
 水を飲もうとしている餓鬼がいますけれども、水か
 ら火が噴きだして飲めなくなつてしまつています。
 いろいろな生理的な欲求があるけれども、それを満
 たすことができないといふ苦しみの世界が餓鬼の世
 界だと考えられています。

図 3

餓鬼の次は、畜生(図 4)です。動物の世界です。
 この挿絵はおもしろいです。いろいろな動物がいま
 す。源信は基本的に動物というものは、お互いに危
 害を与え、あるいは人間によつてこき使われるもの
 だと定義しているわけです。

しかしこの絵を見ますと、それ以外に動物の世界
 の苦しみの根源といえますか、道理といえますか、
 そういうものが見えてきます。それは何なのでしょ
 うか。一言でいうと、弱肉強食の世界と言つていい
 かと思ひます。たとえば右上ではカラスがミミズを



図 4

食べています。右下ではネコがネズミを食べています。

中央では、人間によって牛や馬がこき使われている。そして一番下には竜です。海の中にいる竜があがってきて、何かの動物を食べているのです。お互いを害し合う、危害を加え合って存在している世界というのが『往生要集』の中の畜生の世界ということになります。

次は阿修羅の世界(図5)です。これも江戸時代の版本ですから、阿修羅は侍として描かれています。本来、阿修羅は海の底や山のあいだに住んでいる畜生(動物)の一種で、戦いを好む存在ですけれども、ここでは阿修羅を侍に置き換えて絵にしています。

源信の人道観

阿修羅の次に出てくるのは人間の世界です。源信は人間を三つの視点からおさえます。それは不浄・苦・無常という三点です。『往生要集』の六道の説明の中、人間の説明は地獄の説明に次いで長いものです。

まずは「不浄」についてです。源信は私たちの体の中



図5

には無数のムシやウジがいて、体は本当に不浄なものなのだと言っています。源信は経典を引用して「人間は、どんなにおいしいものを食べたとしても一晩経てばそれが糞になってしまう」と言っています。また極端な表現ですけれども、「人間というのは、美しい花瓶の中に糞が詰まっているようなものだ」とも述べています。死んだ後は体がどんどんと腐敗していった、最後には骨になって消えてしまうことも強調されています。

そして二つ目が「苦(苦しみ)」です。源信は、人間の直面する苦しみを「内苦(内なる苦)」と「外苦(外からくる苦)」に分けます。「内苦」として、人間はさまざまな病気で苦しむことなどが、そして「外苦」としては、投獄されたり、飢饉に遭って飢えに苦しむことなどが挙げられています。そのような苦しみに侵されているのが人間なのだと言信は述べています。

そして最後に「無常」です。それを最もよく表現



図6

する言葉として、『往生要集』の中に引用されている『涅槃経』の言葉を紹介したいと思います。

人の命の停まらざること、山の水よりも過ぎたり。今日存すれといえども、明くればまた保ち難し。いかなぞ心をほしいままにして、悪法に住せしめん。

人間の命というのは、山の上から滝の水が流れてくるよりも早く過ぎ去ってしまう。今日生きているからといって、明日生きているという保証はどこにもない。それなのに、どうして好き勝手なことをして、仏道を求めないで、悪いことばかりしているのだろうか。早く仏道に目覚めなさいと言っているのです。

この人間の世界(図6)についても挿絵がありますので、これを見ていただければと思います。先ほどの「不浄」のところ、人間は死んでから体が腐敗していくという言葉がありましたけれども、これがそれです。人間が死んで鳥に食べられています。

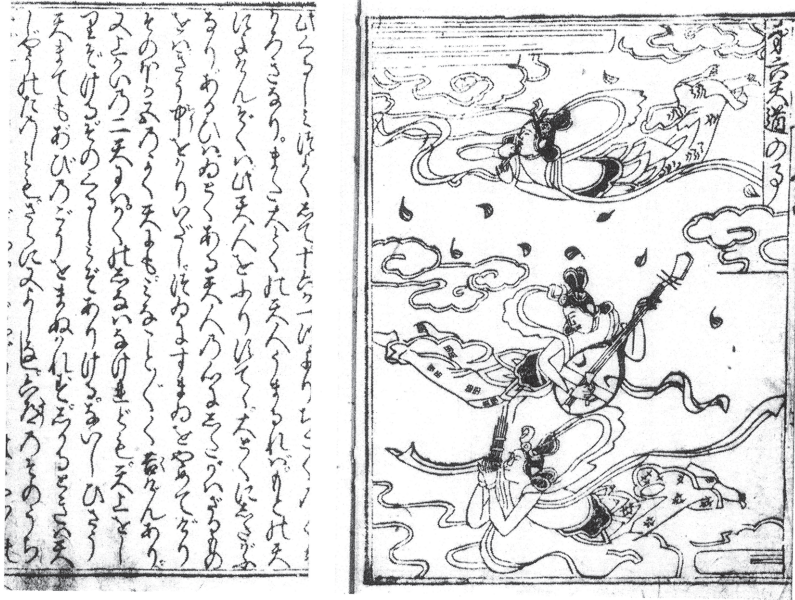


図7

最終的には骨になってしまつて、バラバラになつた骨をオオカミやキツネがどこかに持ち去っています。結局、体がバラバラになつて消えてしまふ。これが人間の究極の姿なのだということを源信は語っているわけです。

六道の最後は天人の世界(図7)です。天の世界は、私たちの想像を絶するほど素晴らしい世界ですけれども、やはりこれも迷いの世界の一部なのです。輪廻転生の一部です。ですから天人もいつかは死ななければなりません。『往生要集』によりますと、天人の命が終わるとき、身体には五衰の相が現れ、地獄の苦しみよりもはるかに大きい苦しみを感ずるとされています。

このように、六道の世界はすべて最終的には苦しみで満ちています。そこには苦しみのないところはない、六道の中に留まる限り、本当の安らぎを得ることはできないと、源信は『往生要集』の中でおさえているのです。

『往生要集』の極楽観

では、本当の安らぎが得られる世界はあるのかというと、それはちゃんとある、それは阿弥陀仏の浄土なのだと言信は言います。その浄土の説明をするのが第二章にあたる「欣求浄土」です。ここでは、浄土の素晴らしい点を「十楽」として列挙して、それぞれについて詳しい説明を行っています。それら十楽の名前を挙げておきますと、次の通りです。

- 第一 「聖衆来迎の楽」
- 第二 「蓮華初開の楽」
- 第三 「身相神通の楽」
- 第四 「五妙境界の楽」
- 第五 「快樂無退の楽」
- 第六 「引接結縁の楽」
- 第七 「聖衆俱会の楽」
- 第八 「見仏聞法の楽」
- 第九 「随心供仏の楽」
- 第十 「増進仏道の楽」

これらを一つずつ見ていく時間もありませんので、二、三の点を見ていきたいと思います。

この絵が「聖衆来迎の楽」(図8)です。日本では、このような来迎図がたくさんつくられました。浄土の最初の素晴らしい点というのは、臨終を迎えた人には阿弥陀仏が直々にお迎えに来てくれるということです。阿弥陀仏

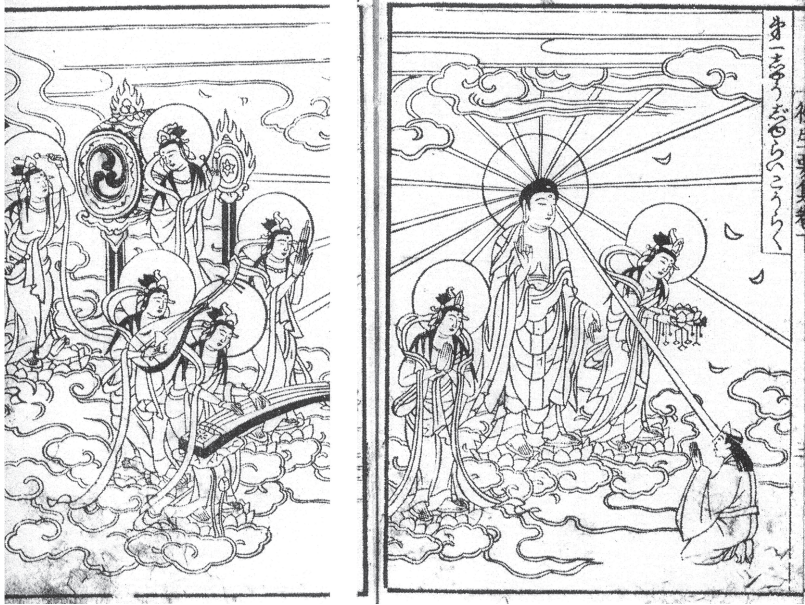


図 8

が多くの菩薩を引き連れて迎えに来ることが、最初の楽です。

次に第四「五妙境界の楽」では、浄土は何でもが素晴らしいことが挙げられています。「五妙の境界」とは五つの感覚器官の対象という意味です。五つの感覚器官とは、眼・耳・鼻・舌・身のことです。浄土では、眼に見えるものすべてが素晴らしい。耳で聞こえる音も全部素晴らしい、鼻で嗅ぐ香りも悪臭はなく素晴らしい。また舌で味わうもの、手で触るものも全部が素晴らしいと述べられています。

源信は、まずは浄土はとにかく素晴らしく、私たちを感覚的に楽しませてくれるところであることを強調しているわけなのです。これは大切なポイントだと思えます。

しかし浄土は、単に感覚的に素晴らしいところだけではないのです。どちらかというとな源信は、浄土には多くの優れた仏教の先輩たちがいて、仏道を求める上で適切に指導をしてくれる点を重視していま

す。浄土には観音や地藏を始め多くの大菩薩がいて私たちの仏教の学びを助けてくれると云うのです。これが第七の「聖衆俱会の楽」です。そして第八の「見仏聞法の楽」では、何よりも、覺りを開かれた阿弥陀仏がおられるので、阿弥陀仏から直接仏教の教えを受けることができるかとされているのです。ここで源信は、浄土に往生することは、単に素晴らしい世界に行くのではなく、仏道の歩みの一環であることを説いているのです。

二十五三昧会

では、どうすれば浄土に往生することができるのかということが問題になるわけです。『往生要集』の中で源信は「念仏すれば浄土に往生できる」と言います。その教えに直接影響されたのかは定かではありませんが、『往生要集』が書かれた翌年に、源信が隠遁していました横川の僧侶たちによって「二十五三昧会」という念仏結社が始められます。この「二十五三昧会」は、一言でいうと互いに浄土に往生できるように助け合う念仏結社です。興味深いことに、いろいろな記録をたどっていきますと、源信は最初からその一員ではありませんでした。会が結成されて半年経ってから結縁しました。しかし、それ以降ずっと源信は「二十五三昧会」の主導的な役割を果たしたという経緯があります。

「二十五三昧会」には二つの中心的な行事がありました。一つは、毎月十五日に一ヶ所に集まって、そこで夜を徹して不断念仏を行うことでした。一晚中ずっと念仏を称えるわけです。なぜそういうことをするのかというと、臨終に正しく念仏ができるように、ある種のトレーニングをするためであったようです。臨終のときには、身体的にも精神的にもいろいろな苦しみがあり、なかなか念仏に集中することができなくなりますが、そのような状態に置かれても、自動的に念仏が称えられるようにと、毎月一回集まって念仏を称え続けるトレーニングを行いました。

そして二つ目の行事ですが、これも非常に大切なことなわけですけれども、この結集の中に重病人が出たら、その病人を往生院という施設に移し、ほかのメンバーが二人一組でその病人を看護することになっていました。その二人のうちの一人は病人の体のケアをして、もう一人は、これは精神的ケアと言ってもいいと思いますけれども、念仏を称えるように促して一緒に念仏をしてあげるので。そしてとうとう臨終のときになりますと、二十五三昧会の全員が集まって、一緒に念仏を称えて、病人が念仏できるように励ますということをしました。山折哲雄先生が二十五三昧会について論文を書かれたのですけれども、その中でこの念仏結社を「死のための団体」と評されていることは納得させられます。

『往生要集』の中で源信は、まず六道の苦しみを克明に述べ、私たちの迷いの世界はどこを見ても苦しみに満ちていて、そこから早く逃れなければいけないと強調します。そして、その上で本当の安らぎを得る世界——つまり阿弥陀仏の浄土——がちゃんと存在することを示して、その世界へ往生するために念仏を称えるようにと私たちに伝えてくれているのです。

『往生要集』といえは地獄を説く本であると多くの人々が受け止めていると思いますけれども、そうではありません。地獄だけではなくて、私たち人間の世界も地獄と同じように苦しいところである。しかし、そのような苦しみを超えた世界が現に存在するのだと強く訴えているのが『往生要集』であると思います。

時間がまいりましたので、これで終わらせていただきます。どうもご清聴ありがとうございました。

出典

図1 源信撰『往生要集』巻中、大谷大学図書館蔵

図2
8
西田直樹編著『仮名書き絵入り往生要集の成立と展開』和泉書院、二〇〇一年

〈キーワード〉源信、六道、二十五三昧会

〔編集委員会付記〕

二〇一八年度大谷学会春季公開講演会では、本学教授ロバート・ローズ先生の講演の後、日本文学研究者であるロバート・キャンベル先生に「文学の契機として現れる「苦楽」に関する考察」という題にて講演をいただいた。以下にその講演要旨を掲載する。

一

日本の言語文化における「苦」と「楽」という概念の重要性について、江戸時代から明治時代の文学者を参考にしながら考えてみたいと思います。

私はニューヨークのブロンクスで生まれ育ちました。アイルランドからの移民であった祖父は、私が学校からしよんぼりした顔で帰ってくると、“Every cloud has a silver lining”（暗い雲にも銀の裏張りがある）と言ったものです。私は夏の入道雲を眺めるのが好きで、いちばん楽しい時間はアパートの裏側の非常階段でぼーっとしているときでした。

人は誰しも楽しいことや苦しいことを個人的な時間や空間と結びつけています。そしてそれをどう表象するかは時代や文化から影響を受けています。

「苦あれば楽あり」という言葉があるように、日本では「苦」と「楽」をメビウスの輪のようにつながったものと考えますが、英語圏では、少なくとも十八世紀の終わりから十九世紀の産業革命以降の状況を見ると、「苦」を最小化することによって「楽」を最大化する、不幸をかき消すことによって幸福に向かおうとする功利主義の考え方をとっています。そしてこの考え方が明治以降の日本でも導入され、近代化を支える大きな柱となりました。

二

しかし十八世紀のイギリスの小説家、ローレンス・スターンは喜怒哀楽をサイクルのようなものとして捉えており、功利主義からは理解しにくい言葉を残しています。“Pain and pleasure, like light and darkness, succeed each other.” 「苦痛」と「快楽」は、光と影と同じように相次いで現れる)です。闇が消去されて光が満ちるのではなく影があるから光がそれに次いで現れる、そしてまた振り子のように元に戻るということです。今から思えば祖父が言った“Every cloud has a silver lining”も同様のニュアンスをもっていました。このスターンの言葉は非常に日本的な感覚だと思えます。

この言葉は、スターンの全集ではなく夏目漱石の全集に収録された、一九〇〇年から一九〇二年にかけてのロンドン留学時代のメモにあつたものです。私はその後の漱石の小説や手紙のなかにスターンの言葉、功利主義的でない思考が投影されていないかを確認しました。

一九〇六年に書かれた『吾輩は猫である』では「苦」でも「楽」でもない、なにも感じないことが至楽だとされています。漱石の小説では、登場人物たちが「苦」と「楽」の往復運動をしますが、「快楽」あるいは安定した生活から完全に零落して駄目になる主人公はあまりなく、非常にハッピーな人もいない。どこかで精神的に強い違和感を抱えて生きる個人ということが漱石のテーマだったとすると、その基礎には、ロンドンで経験した功利主義的な思想に対する彼の相対感・違和感が水脈のように流れているのではないかと考えました。

三

漱石はそうした思想をどこで身に着けたのでしょうか。文化的に継承したものかもしれないと考えて、江戸時代

のいろいろな文献を探ってみました。

江戸時代の初期（一六三〇年代）には沢庵禪師が「楽」を定義し、絶対的な「苦」も「楽」もないとしています。十八世紀の終わりに老中になった松平定信は「喜び」と「憂い」を「環（たまき）」、「つまり首飾りのようなものとします。「喜び」と「憂い」はつながっており、運動する球体のようなものとするのです。松平定信はヨーロッパから輸入した地球儀を見ながらこの比喩を考えたのではないかと私は想像します。幕末の十九世紀には、福井藩の城下に生きた和学者・歌人の橋曙覧が「独楽吟」のなかで、なにかが欠如しているときにそれが契機となり「楽しみ」を感じるとしている。沢庵禪師や松平定信の話からしますと、「苦」のサイクルが終わり「楽」の芽が出はじめている瞬間にある「楽しみ」を書いているわけです。

四

橋曙覧のこの歌集は、漱石と同時代の正岡子規が明治時代に見出して有名になりました。子規は長く病床にありましたが、自分が良くなっていくとは予想していない。樂觀視しないなかで「苦」のなかに「楽」の根を見出そうとしました。絶対的な「苦」のなかで「楽」を作品のなかにどう位置づけるのか、表現するのかを考えていたのです。

苦しい状況のなかでも子規が書いたことには、「苦」も「楽」も引き受けて生きるのが人間であり、人は人と渡り合い、人になにかを残していくという意識があったと思います。夏目漱石の『道草』の冒頭の部分、『吾輩は猫である』の紹介した部分も「苦楽」がひとつの契機になって書かれたと思います。彼らは意識的に「苦楽」について考えていたのです。そして私は、日本のさまざまな言語文化を見渡す際に「苦楽」を「苦」と「楽」ではなく「苦楽」というひとつの球体のようなものとする考え方をすることによって、そこにいくつかの水脈のようなものが見てと

(ローズ) 92

れるのではないかと考えているのです。